



教室はまちがうところだ

少し前の新聞に絵本「教室はまちがうところだ」についての記事が載っていました。この詩は1967年に静岡市内の中学教諭が書いたものが全国に広がったそうです。2004年には書籍化されて、企業や大学でも活用され、さらには韓国や中国でも版を重ねているそうです。担任から学級の子供たちへの呼びかけの詩ですが、以下はその一部です。

まちがうことをおそれちゃいけない
まちがったものをわらっちゃいけない
まちがった意見をまちがった答えを
ああじゃないかこうじゃないかと
みんなで出し合い言いうななかでだ
ほんののものをみつけていくのだ
そうしてみんなで伸びていくのだ
(中略)

はじめからうまいこと言えるはずないんだ
はじめから答えがあたるはずないんだ
(中略)
まちがったってだれかがよ
なおしてくれるし教えてくれる
困ったときには先生が
ない知恵しぼって教えるで
そんな教室作ろうやあ

クラスの友達の前で、堂々と間違えることができる。そしてその間違いが仲間の学びを深める。私自身も中学校で学級担任をしていた頃は、同じようなことを子供たちに求めていました。そのためには、クラスの子供たちが互いを受け入れられる関係性をもっていることが大前提となります。教員の仕事はものを教えることではなく人を育てることだと常々思っていました。木田小の子供たちも、まちがうことを恐れず互いに意見交換できる子供たちに育ってほしいものです。先日明倫中の授業参観に行く機会がありましたが、グループで活発に話し合う姿はさすが中学生だなと感じました。

4年生 福祉学習(盲導犬)

4年生が総合的な学習の時間に福祉について学んでいますが、この日は盲導犬を連れての方から直接話を聞く機会がありました。福井県内では6頭しかいない盲導犬です。どのように日々の生活を支えてくれているのか等の話を聞くことができました。盲導犬を連れていて人や白い杖を持っている人が困っている様子だったら声をかけて欲しいというお願いには、大きく頷きながら聞き入っていました。みんなが支え合える社会をつくっていききたいものです。



木田ちそプランター

「誇りと夢・わがまち創造事業木田地区委員会」まちづくり部会の方々から伝統野菜「木田ちそ」のプランターをいただきました。3年生児童が地域学習の一環として成長を観察します。手で触るとほんのりとちその香りがするので、子供たちは顔を近づけて匂いを嗅いでいました。地域を知ることは地域への愛着につながる大切な学びだと思います。



交通安全教室 1・3年

1年生と3年生は、それぞれ春先に交通安全教室を開催します。1年生は道路の歩き方を学ぶために学校近隣の道路を歩きました。二人組で慎重に左右確認し、道路を渡っていましたが、やはり道路を横断するというのは危険を伴うものです。止まってくれた車が動き出したのを見ていなくて、おまわりさんに横断を制止される場面もありました。

3年生は、自転車の乗り方を学びました。しっかり点検をして乗る事などをおまわりさんから教えてもらっていました。放課後に子供たちが遊んでいる様子などを時々見かけますが、自転車は子供たちにとって必要不可欠なものになっているようです。自転車に乗り出すと行動範囲がぐっと広がります。同時にたくさんの友達が一緒に遊べる状況も増えます。自転車で連なって走っている姿も見ます。先頭が続いて十分な安全確認をしないまま交差点に進入する様子も見かけることもあります。自転車運転者は被害者にも加害者にもなり得ることを子供たちに口酸っぱく言い聞かせてください。

また、車を運転する側の我々大人も安全運転を心掛けたいものです。



委員会活動・クラブ活動



学校では、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりより生活を築くことなどを目標として、委員会活動やクラブ活動などを行っています。これらの活動は学級の枠を超え、高学年の児童がリーダーシップを発揮する場となっています。



委員会では、協力して環境整備をする姿や啓発のためのポスターを書く姿、問題解決に向けて話し合いをする姿などが見られます。また、クラブの時間には自分の好きなことを楽しむ姿が見られます。昨年度の将棋クラブの外部講師に加え、今年度は公民館のご協力でヨガと太極拳に講師の方々をお招きすることができました。かつては隔週でかなりの回数を行う事ができていたクラブですが、現在は前後期それぞれ数回しか実施できません。それでも、子供たちは楽しそうに取り組んでいます。

34人/日 何の数字でしょう

何の数字かわかりますか？ 答えは、「6月上半期の一日平均保健室来訪者数」です。これだけの子供たちが入れ替わり立ち替わり来室すると、二人の養教が対応しても対応しきれないときもあります。時には養教がケガをした児童を病院に連れて行かねばならないときもあり、保健室の留守を守るために職員室から応援隊が向かうこともあります。

大人の目から見たらほとんど擦り傷でも子供たちにとっては保健室を頼るようなケガなのです。ほとんどの子は「だいじょうぶだよ」という一言で安心して教室に戻ります。保健室が子供たちの心に安心感を与えるという面は否定できませんが、ケガをしない遊び方を工夫する力や高学年になればケガの程度を自分で判断できるような力も求められるのではと思います。もちろん人にケガをさせるようなことは論外ですが……。